

イギリス成人教育史研究における労働者階級と女性の位置

— R. Peers、T. Kelly、R. Fieldhouseの著作を手がかりに —

柴 原 真知子

Working Class and Women in Historical Researches of British Adult Education:

— From the analysis of the works by R. Peers, T. Kelly and R. Fieldhouse —

Machiko SHIBAHARA

1 はじめに

本稿は、20世紀における代表的なイギリス成人教育史研究者であるR. Peers、T. Kelly、R. Fieldhouseの著作を比較検討することから、イギリス成人教育史研究において労働者階級と女性はどのようにとらえられ、両者はどのような関係にあったのかを明らかにしようとするものである。特に、階級とジェンダーに焦点をあてることにより、イギリス成人教育の依拠する枠組みの特性と限界性を解明し、現代におけるイギリス成人教育 (British Adult Education)¹⁾の意義と可能性を探求する土台をつくることが本稿の目的である。

筆者は、イギリス成人教育を、世界に先駆けて産業革命を経験し、資本主義を発達させてきたイギリス独自の教育のあり方であるととらえている。イギリス成人教育とは、産業構造の変化とともに大量に出現した労働者階級が急速に変化する社会状況と、深刻な問題をもたらした階級分化²⁾を通して、様々な問題や葛藤と対峙しながら蓄積された、人々の生活と密接に結びつく学習活動を基盤とする成人の学びの総体である。したがって、イギリス成人教育史とは、労働者階級を中心として行われた学習活動、学習をめぐる思想、学習機会を提供した組織など、成人の学習をめぐる一連の動きからなる、イギリスにおいて独自に生成された歴史であるとみることができる。

イギリス成人教育の特徴は、伝統的に非職業的でありベラルな (教養主義的な)³⁾ 学習に特に価値がおかれてきたことにある。産業革命を他の国々よりも一足早く経験したイギリスでは、このような学習を支えるボランティアズム (Voluntarism)⁴⁾ といった精神や、科学技術や読み書きを学ぶ機会が、国家に頼ることなく提供されるという基盤があった⁵⁾。しかし、1950年代、60年代の「イギリス病」と呼ばれる状況が生じ、1980年代にはサッチャー改革による経済の立て直しが行われた。このような時代の流れの中で、イギリスにおける成人の学習機会は国家や社会の経済的課題と密接に関係するようになり、職業訓練的傾向が強められていった。それゆえ、近年のイギリスにおいて、「2000年以降はEUと連動する『生涯学習』政策を展開する中で、『成人教育』はすでに死語に近づき、『成人教育』の名のもとに蓄積された理論的・実践的蓄積

と固有の価値は、過去の『遺物』とみなされるに至った」⁶⁾ という指摘もなされているのである。

人々は生涯にわたり学びつづけるものであり、人々の学習機会はいつでも、どこでも、誰にでもアクセスできるものであるべきであるというのが生涯学習の考え方である。とりわけ、そのなかでも、成人の学習に焦点をあてる場合、その背景にある「おとな」という社会的存在が独自にもってきたコンテキストを踏まえなければ、成人の学習支援を十分に考えていくことはできないのではないかと考える。したがって、筆者は、成人教育の歴史、とりわけ世界に先駆けて資本主義を発達させ、それゆえに働く人たちが抱えた問題や葛藤を如実に反映してきたと考えられるイギリス成人教育の歴史に注目するのである。

イギリス成人教育の歴史書として最初のものと考えられるのは、J. W. Hudsonの *A History of Adult Education* (1851)⁷⁾ である。ここで、Hudsonは、主にメカニクス・インスティテュート（以下、MIと記す）と文芸協会（literary societies）を中心として、様々な組織に関する綿密な調査に基づいた歴史研究を行った。Hudsonの研究は、19世紀前半までを扱ったすぐれたイギリス成人教育史研究として現代においても多く引用されている⁸⁾。しかし、現代のイギリス成人教育を考える場合、特に19世紀後半から20世紀初頭の展開が重要であること、そして、MIや各種協会、組織の歴史的動向を概観するだけではイギリス成人教育史の実像をとらえきれないと考えられる。したがって、本稿ではさしあたり考察の対象からはずすこととする。

20世紀に入るとイギリス政府によってイギリス成人教育のそれまでの蓄積を跡づけようとする動きがあった。その歴史的事実として、第一次世界大戦後にイギリス中央政府によって設置された復興省成人教育委員会が1919年に発表した「最終報告書」⁹⁾（以下、通称に従い、1919レポートと記す）がある。1919レポートは、その第一章を19世紀初頭の成人教育の展開から、大学拡張運動、テュートリアル・クラス運動に至るまでの歴史的叙述にあてている。同レポートは、極めて完成度の高い歴史的叙述として後の歴史研究に役立てられただけでなく、その後のイギリス中央政府によるイギリス成人教育政策に大きな影響を及ぼした勧告を行ったのである¹⁰⁾。

イギリス成人教育史の研究は、通史的ではないものも含めればイギリスはもちろんのこと日本においても決して少なくない。管見の限りでは、イギリス成人教育史研究のなかでも、評価が高いものには、例えば、社会生活史的なアプローチをとったJ. F. C. Harrisonの *Learning and Living 1790-1960* (1961)¹¹⁾ がある。また、労働者階級運動の視点からイギリス成人教育をとらえた歴史書としてB. Simonの *Education and the Labour Movement 1870-1920* (1965)¹²⁾ があり、これは他の二つの著書とあわせて日本では『イギリス教育史』として邦訳されている¹³⁾。その他、イギリス成人教育の歴史のなかでも特定の事象や時期、人物に焦点をあてたイギリスの文献は数多い¹⁴⁾。

イギリス成人教育の歴史を通史的に研究した日本の文献には、宮坂広作著『英国成人教育史の研究ⅠⅡ』(1996)¹⁵⁾、小堀勉編著『欧米社会教育発達史』(1978)¹⁶⁾、矢口悦子著『イギリス成人教育の思想と制度—背景としてのリベラリズムと責任団体制度』(1998)¹⁷⁾ が挙げられる

だろう。通史ではないが、イギリス成人教育史を研究した日本の文献には、朝倉征夫、加藤詔士、香川正弘などによる論文がある¹⁸⁾。

これらの先行研究を踏まえたうえで、イギリス成人教育史の通史的研究として代表的と考えられるのは、以下の著作であり、これらを本稿において考察の対象としたい。それは、R. Peersの*Adult Education: A Comparative Study*, 2nd edition (1959)¹⁹⁾、T. Kellyの*A History of Adult Education in Great Britain*, 2nd edition (1970)²⁰⁾そして、R. Fieldhouseらによる*A History of Modern British Adult Education* (1996)²¹⁾の3点である。これらの著作は20世紀後半、そして21世紀に至るまでイギリス成人教育史研究のみならず、成人教育の諸議論において多く引用されてきた²²⁾。3者はそれぞれ、イギリス成人教育に研究者として携わりながらも、執筆にあたった時代と研究的立場は異なる。筆者は、これら3点の著作を比較検討することを通して、イギリス成人教育史研究の特性と限界性を明らかにし、現代の成人の学習支援に貢献できるような成人教育研究へとつなげていきたい。

これらの著作を検討するうえでの筆者の問題意識は階級とジェンダーにある。イギリス成人教育史は、宗教教育、職業教育、技術教育、権利要求運動の活動のひとつとしての学習活動など様々な要素をもつといえるだろう。多様性を特徴とするイギリス成人教育史であるが、多くのイギリス成人教育史研究において学習主体として光があてられてきたのは、中産階級のように高等教育機会を手にするのでなかった労働者階級であり、そのなかでも描かれてきたのは男性であった。女性学習者の存在は、史料や統計調査によって明らかな、数やデータの上において確認できるにすぎない。イギリス成人教育史研究において女性は、概して不可視的な存在として扱われてきたといわざるをえないのである。

現代の成人の学習機会において、女性はその主要な担い手であることはあらゆる面において明らかである。しかし、現代の女性が手にする学習は、決してあたりまえのものではない。現代に至るまでに、女性が試行錯誤しながら積み重ねてきたもの、そして彼女たちの活動や経験の蓄積が織り成す歴史があるはずである。したがって、成人学習者としての女性もまた、労働者階級男性と同じように、その歴史的背景、独自のコンテクストをもつ存在であり、イギリス成人教育史のなかで適切に位置づけられ、描かれなければならないのではないだろうか。

以上の問題意識に加えて、筆者は、イギリス成人教育史研究はなぜ成人女性の学習を積極的に跡づけてこなかったのか、現代における成人教育は彼女たちの学習支援にどのような貢献ができるのかという問いを追求していく作業の一段階として本稿を位置づけたい。

以下では、年代順にPeers、Kelly、Fieldhouseによるイギリス成人教育史研究を、特に階級とジェンダーという視点から、3者の異なる立場を明確にしながら比較検討し、現代におけるイギリス成人教育史研究についてどのような示唆をえられるのかを考察する。

2 R. Peers, *Adult Education: A Comparative Study* (1959) の検討

*Adult Education: A comparative study*はRobert Peers (1888-1972) によって、1958年に著された。1959年に第二版、1972年に第三版が出版され、イギリス成人教育研究においてはもっともよく参照されている文献の一つであるといえる²³⁾。Peersは、1922年から1952年まで

成人教育学部長をつとめたノッティンガム大学において、「WEAと協力して労働者教育を実践するとともに、成人教育の研究を体系化して学問にまで高め、イギリスで初めて成人教育学の教授になった」²⁴⁾と日本でも紹介されている。このように、大学成人教育の研究者、実践者として、Peersがなしたイギリス成人教育への貢献は注目されてきたといえる²⁵⁾。

他にも *Adult Education in Practice* (1934) や *Fact and Possibility in English Education* (1963) などの著作がある。そのなかでも1958年初版の本著作は、イギリス成人教育の体系化に尽力したPeersが、歴史研究だけでなく成人教育を実践する側の立場から、方法論や成人学習論、さらには他国との比較研究をも含めた著作である²⁶⁾。イギリス成人教育史研究にあたる第一部は、19世紀を中心とした歴史的概観を行うことによって、第二部の1950年代当時における現代のイギリス成人教育への議論へとつなげようとするものである²⁷⁾。

Peersは「1850年以前」という時間的区切りすることによって、イギリス成人教育の歴史的叙述を始める。宗教の普及活動に関連した成人の学習機会があり、その流れをうけて成人の識字教育の場として成人学校の設立の動きがあったことが「1850年以前」の特徴として挙げられている²⁸⁾。Peersの研究の特徴の一つは、20世紀を現代のイギリス成人教育運動が展開する時代とみて、19世紀はその基盤を築いた時期ととらえた点にある。そして、19世紀のなかでも特に後半の動向を重点的に跡づけた²⁹⁾。

Peersは、現代のイギリス成人教育運動は第一次、第二次世界大戦の戦間期を経て確立していくとした。とりわけ、WEA（労働者教育協会）と連携して行った大学テュートリアル・クラス事業の発展に注目し、「属する時代の教育的要求への貢献として大学テュートリアル・クラスの価値と重要性を検討しようとすることは不可欠である」³⁰⁾と述べた。Peersは、不安な社会状況のなかでの大学テュートリアル・クラスの発展³¹⁾と、戦間期におけるイギリス政府発表の報告書の勧告を根拠として、イギリス成人教育の確立期を論じたのである。例えば、1919レポートにおいて「大学に関する勧告が最初にきたことは重要である」³²⁾とし、1919年以降もイギリス政府によって発表された報告書における成人教育に関する勧告が、大学側が提供者となる成人教育の組織化・体系化を推し進めたという見解を示した。

Peersは特に、大学が労働者階級組織との連携によって体系化が進んだ成人教育はイギリス国家における市民権の発展に寄与してきた、という点を強調した³³⁾。そして、市民権をもった成人が、義務と権利を行使するには、幅広い視野、バランスのとれた判断、直面する問題への理解、忍耐などが必要であるとする³⁴⁾。Peersによれば、このような資質を身につける学習機会を提供する成人教育は、職業的教育を目的とするものでもなく、当時の乏しい教育システムの補完的役割だけを担うものでもない。成人教育とは「自由な社会の市民の教育の最終段階として、つまり、個人のアクティブな人生を通して続くべきステージとして」³⁵⁾とらえられるべきであるとする。

19世紀をイギリス成人教育史の始まりとするPeersは、イギリス成人教育の展開の背景には産業革命以後の大きな社会構造の変化があるとしている。イギリス成人教育史研究を19世紀から始める理由について、「この動き（イギリス成人教育の動き…引用者）が第一に消費社会で何気なく暮らしながら商業的利害とゆるく結びついた、小作農と小規模に働く手工職人からな

る国を偉大な産業民主主義の国へと変えた革命の一部をになっていた」³⁶⁾ からであるとしている。つまり、イギリス成人教育は、産業と民主主義が発達を遂げた時代において、一定の役割を果たしてきたものとPeersはとらえたのである。そして、本著作が執筆された当時において、「成人教育は市民としての教育の最後のかつ継続的な段階であり民主主義の全体的な概念に現実性と意味そして実の中味を付与するのに必要なものとしてみなされなくてはならない」³⁷⁾ と述べて、Peersはイギリス成人教育を社会的・国家的に意義づけようとした。

以上のように、Peersの研究はイギリスにおける市民性の追求に集約されていくといえるだろう。しかし、Peersの用いる「市民」という言葉は、普遍性を持つものであるが、実質的には限定的な概念であると指摘できる。それはPeersの研究における女性の位置づけに表れている。Peersは、20世紀前半までの展開において、成人の学習者の構成で最も目立った変化として、あらゆるタイプのクラスにおいて女性の割合が大きく増加したことを述べた³⁸⁾。そして、「成人教育は、大学拡張初期の頃から、女性解放の一つの要素となってきたことは疑いがない」³⁹⁾ とし、その根拠として、テュートリアル・クラスにおける女性の数の変化を示した⁴⁰⁾。しかし、とりわけPeersが中心的に取り上げ、また現代のイギリス成人教育の基礎を築いたとする19世紀の叙述において女性へのPeersの言及は極めて少ない。本著作において女性学習者はイギリス成人教育に補完的につけ加えられる存在として位置づけられているにすぎないと言わざるをえないだろう。

Peersのイギリス成人教育史研究の特徴とは、労働者階級を中心的な学習主体として注目し、政治的・経済的背景と関わらせて論じながら、議論を市民性へと集約させた点にある。そして、労働者階級と連携しながら成人教育を提供する大学の役割と意義についてPeersは積極的に論じようとした。しかし、その「市民」を構成する、学習主体である成人がもつ多様な背景を十分に視野に入れていたとはいえないだろう。これはPeersの研究の立場を反映している。すなわち、成人教育学の体系化にもっともはや着手し、大学成人教育がイギリス社会と国家に貢献すべきものとしていち早く意義づける立場にいたということがPeersの研究枠組みを特徴づけているのである。

3 T. Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain* (1970) の検討

Thomas Kelly (1909-1992) はリヴァプール大学の成人教育の教授で構外教育学部のディレクターとしてイギリス成人教育に関する著作を数多く残している。その主著とでもいえるべき *A History of Adult Education in Great Britain* は、初版が1962年、第二版が1970年、第三版が1992年と、長期間わたって再版されたイギリス成人教育の通史研究である。Kellyは本書以外にもイギリス成人教育の具体的な事象に注目し、例えばメカニックス・インスティテュートや、成人の学習の場としての図書館に着目した著作などがある⁴¹⁾。

Kellyは本著作の「はじめに」において、それまでのイギリス成人教育史研究ではHudsonの *History of Adult Education* (1951) 以降、十分な幅広さをもった歴史研究はなかったとした⁴²⁾。既述のPeersの著作と1919レポートとを並べて「専門的な側面についてはたくさん述べられているし、価値ある短期的な調査はたくさんあるけれども」⁴³⁾ として、Kelly自身の通

史研究の意義を明らかにした。Peersについてはイギリス成人教育への貢献を評価した⁴⁴⁾が、以下に述べるように、いくつかの点でPeersとは異なる分析軸を用いている。

Kellyの研究のPeersとの違いの一つは、イギリス成人教育が一般的に19世紀、20世紀の現象としてとらえられていることにKellyが異を唱えた点にある。Kellyは、中世から18世紀までの様々な成人の学習機会の様相を述べた後で、次のように指摘した。「成人教育はたいてい本質的に19世紀と20世紀の現象としてとらえられる」が、「このような見方がいかに不完全で誤解をまねくものであるかはこれまでの章で明らかである」⁴⁵⁾。このように述べるKellyは、宗教が成人に対して識字教育を提供するきっかけとなったことに注目し、19世紀に至るまでの歴史的経緯にイギリス成人教育の発展の跳躍台になった要素を見出そうとした⁴⁶⁾。

Kellyのイギリス成人教育史をとらえる視野は幅広く、その研究は成人教育のもつ多様性を尊重し、様々な成人教育のあり方を積極的に跡づけようとするものである。Kellyは成人教育は様々な定義されるとしながら、「初期のころ成人教育のもっとも重要な手段 (instruments) は演壇と出版だった。今日でも、公共図書館、映画、ラジオ、テレビは教室より強い影響力をもつ」⁴⁷⁾と述べた。Kellyは、成人の学習のあり方を幅広くとらえ、その総体を社会史的にとらえようとしたといえることができるだろう。

KellyとPeersのイギリス成人教育史研究のもう一つの特徴的な相違は以下の点にみられる。それは、Peersの研究が大学における成人教育の体系化へと向かっていったのに対し、Kellyは労働者階級が手にするようになった様々な学習機会に注目した点である。労働者階級に対する中産階級の学習機会の提供、組織化、そして大学に代表される高等教育機関による成人教育の体系化は、近代イギリスにおける成人教育の特徴をなした。このような学習機会は、「能力を最大限に活用するための例外的な知性と気性をもった労働者階級男性を後押ししただけでなく、より幅広い労働者層の間に知識と思想を広めるのを助長した」⁴⁸⁾のである。ゆえにKellyは、特に19世紀後半において発展した組織や機関だけでなく、成人教育の手段（すなわち、新聞や本、図書館、博物館、アートギャラリーなど）に注目し、時代ごとの様相を明らかにしたのである⁴⁹⁾。

しかしながら、このような中産階級主導のアプローチに問題があったことをKellyは以下のように指摘した。成人教育の提供にかかわった中産階級は「しばしば労働者階級の知性を過小評価し、労働者階級の指導者の胸のうちに燃えさかる政治的・社会的理想を完全に理解しそこねた。中産階級はだいたい、あまりにもパトロン的すぎたし、教訓的で、自身の社会的・経済的立場に対し保守的すぎ、あまりにも厳しく、功利主義的だった。彼らは、宗教的救済、社会秩序、経済的繁栄といった特別な目的に結びつけて教育を考えていた」⁵⁰⁾。このように、中産階級による取り組みを批判的にとらえながら、労働者階級が手にした学習機会の歴史的変遷を積極的にみようとした点がKellyの特徴であるといえる。

イギリス成人教育史を多様な側面からとらえようとしたKellyの研究では女性についての言及も数多い。特に19世紀後半以降の様々な成人教育機関における女性の参加状況、女性の学習機関や組織などについて言及している⁵¹⁾。とりわけ、Kellyが女性の学習として高く評価したのは、大学拡張運動が女性のニーズに応じて始まった点であった。「それまで成人教育は、広

く言えば男性の世界だった…それがここで、初めて主要な成人教育機関が女性のニーズをプログラムの先端に置いたのである。今日の私たちにとってはこれがどれだけ重要であるか認識するのは難しい」⁵²⁾と述べ、長い間排他的であり続けた大学が女性の教育要求の動きにアプローチできたことを評価した。

Kellyは大学拡張運動以後、二つの世界大戦の間もその後もイギリス成人教育において女性の存在は大きかったことを、成人女性の学習機会提供にかかわる機関について述べることによって明らかにした⁵³⁾。しかし、学習主体としての女性について深い考察を行ったとは言い難く、本著作全体がおりなす壮大な歴史の一部を担う力としてその存在感を表しているにとどまっている。

Kellyのイギリス成人教育史研究は、成人教育の場を大学だけでなく、図書館や博物館、音楽や文芸などの各種組織、コーヒーハウスなど社会の様々な場に成人の学びの要素を見出し、全体として学びの社会史ともいえるべき歴史研究となっている。成人教育とは、社会のダイナミズムをつくるような成人の学習への姿勢、関心、要求などを敏感にくみとり、跡づけしていくものであるというとらえ方がKellyの歴史研究の土台にあるのではないだろうか。そして、そのような成人教育の主体として労働者階級に注目しつつ、女性もまたその社会のダイナミズムを構成するひとつの重要な要素として、Kellyの歴史研究のなかに位置づけられていると言えるだろう。

4 R. Fieldhouse et al., *A History of Modern British Adult Education* (1996) の検討

Roger Fieldhouse (1940-) は、本著作の執筆当時、エクセター大学の成人教育教授であり、また生涯継続教育 (Continuing Education)⁵⁴⁾ のディレクターでもあった。WEAでのチューター・オーガナイザーとしての経験をもち、WEAとのかかわりからヨークシャー史、そしてイギリス成人教育の歴史と政治学研究へと研究関心を移行させてきた⁵⁵⁾。

Fieldhouseの他の著作からもわかるように⁵⁶⁾、Fieldhouseは政治や政策、イデオロギーといった観点からイギリス成人教育史にアプローチしてきた。本研究では1990年代までの政治的・社会的文脈にイギリス成人教育史を位置づけている。本著作の目的についてFieldhouseは、「本書は成人教育がどれほど影響力をもってきたのか、社会にどれだけの作用があったのかを検証しようとするものである。本書は成人教育の歴史的展開をそれが起こった政策やイデオロギー的文脈と幅広く関連させるものである」⁵⁷⁾としている。

Fieldhouseは、先駆的な研究者であるPeersについて、その業績を評価しつつも批判的な見解を示している。Peersが初の構外教育学部長として在任していたノッティンガム大学での成人教育への取り組みは他の大学にも広がり、大学構外教育のネットワークがつくられていったとする⁵⁸⁾。しかし、イギリス成人教育史研究についてFieldhouseはPeersとは異なる視座に立つ。Peersは19世紀の歴史的変遷を20世紀のイギリス成人教育運動につながる土台として研究の中核においた。これに対し、Fieldhouseは19世紀、20世紀のイギリス成人教育の発達過程を批判的に検討することにより、現代のイギリス成人教育が抱える課題を明らかにしようとしたのである⁵⁹⁾。

Kellyの歴史研究については、本稿でも検討した著作を取り上げ「はかり知れないほど貴重で、豊かな細かい情報をそなえた」歴史書であり、Fieldhouseの本著作はKellyの研究を「置き換えようとするのではなく、その上に立とうとするものである」⁶⁰⁾とした。とりわけ、Kellyが「成人教育の補助的なもの (The Auxiliaries of Adult Education)」として、安価な本や新聞、公共図書館、アートギャラリー、博物館に注目したことが紹介され、歴史研究家としてのKelly視点が評価されている⁶¹⁾。

PeersやKellyの研究と比較して明らかなのは、Fieldhouseの研究は19世紀から20世紀にかけて、社会が産業化社会からポスト産業化社会への変遷をたどってきたイギリスにおける成人教育の変容を描き出そうとした点である。イギリス成人教育は19世紀後半から20世紀にかけて、高等教育機関と結びつきを強め、体系化、組織化されながら展開してきた。しかし、Fieldhouseは、このような歴史的展開を批判的に検討することによって、現代におけるイギリス成人教育の問題を浮き彫りにしようとするのである。

このような問題意識をもつFieldhouseは、イギリス成人教育が現代に残してきた「遺産」として以下の点を指摘する。それは「成人教育が、実用主義的、技術的、職業的教育を、軽蔑したものでなければ、かなり過小評価してきた伝統と実践を20世紀に持ち越してしまった」⁶²⁾ことである。高等教育機関と連携して発展してきたイギリス成人教育は、伝統的な大学文化を反映し、「それはリベラルな成人教育における人文科学のヘゲモニーを確立し、主な結果として20世紀には非職業的でリベラルな成人教育と、職業的実用主義的な成人教育との区別を永続化させた」⁶³⁾とする。

一方で、イギリス成人教育の歴史が現代に残した「遺産」としてFieldhouseが肯定的にみるのは、イギリス成人教育が社会的運動とのかかわりをもって展開してきたことである。「社会的目的をもった成人教育という強い伝統、そして成人教育は政治的・社会的行動に貢献することができるし、するべきなのだ」という信条を20世紀は受け継いできた」⁶⁴⁾と述べ、現代に引き継ぐべきイギリス成人教育の歴史的意義をFieldhouseは積極的にとらえようとするのである。

しかしながら、現代の文脈に照らし合わせればこのように社会的目的性の強いイギリス成人教育が、課題を抱えていることは明らかである。特に1970年代以降、国家・社会の抱える財政問題への対応がせまられてくると、多くの新しい取り組みは削減せざるをえず、成人教育は「不利益層 (the disadvantaged)」の人々がアクセスできないという矛盾を抱えることとなったのである⁶⁵⁾。1990年代になると継続教育機関 (the further education sector) が拡大し、成人学習者にとって学習機会は身近なものになった。しかし、「より幅広いリベラルなアプローチを犠牲にして職業的で実用主義的な価値がより強調された」⁶⁶⁾という状況を生んだのである。結果として、あるカテゴリーの学習者を増やしたものの、「他の人々、特に高齢者や多くの女性を排除している」⁶⁷⁾としてFieldhouseは現代におけるイギリス成人教育の抱える問題性を厳しく指摘するのである。

イギリス成人教育史における女性については「女性と成人教育」というタイトルの章で取り上げられている。この章は、19世紀から1990年代にいたるまで、学習者としての女性が手にしてきた学習機会や1919レポートなど各報告書における女性の位置について明らかにすることを

目的としている⁶⁸⁾。学習主体として周縁的な位置づけにあった女性に注目することによってFieldhouseは、現代のイギリス成人教育が抱える課題を浮き彫りにするための一つの足がかりをえようとしたのではないだろうか。

イギリス成人教育は社会的な目的をもち、不平等や社会的抑圧といった問題に対峙しようとしてきた。しかし、歴史の批判的な検討によりFieldhouseが明らかにしようとしたのは「成人教育が社会の不平等や抑圧のすべてを解決する能力には限界があるということである。現実的にそれ（成人教育…引用者）は社会に現存する文化的、イデオロギーの限界の中でのみ機能しうる。…最近では、成人教育は社会の性質よりむしろ個人に問題を位置づけ、個人のニーズを満たしたり、欠けている部分を補正することによってほとんどの問題を解決しようとする、ポスト近代の断片化のイデオロギーを反映している」⁶⁹⁾。Fieldhouseはこのように述べ、イギリス成人教育がもつ枠組みの限界性を指摘したのである。

Fieldhouseは、成人教育はその特性として、国家・社会のもつイデオロギーに制約を受けるものであるという結論に達する。しかし、Fieldhouseがイギリス成人教育の「遺産」として継承し、これからの成人教育の可能性へとつなげようとするのは、イギリス成人教育が社会的な動きと関わって展開してきた歴史的意義である。イギリス成人教育の歴史的展開は「19世紀の教育を受けた層の文化を反映して、極めてリベラルで、非職業的偏向のある、男性的な気質」⁷⁰⁾という特性をもってきたことをFieldhouseは鋭く指摘している。しかしながら、Fieldhouseは「成人教育機関は多様な社会的運動とかかわり究極的には平等と社会正義を包括した民主主義的な社会目的に貢献するようでなければならない」⁷¹⁾とし、これからのイギリス成人教育の発展へとつなげようとするのである。

5 現代におけるイギリス成人教育史研究への示唆—階級とジェンダー—

本稿は、Peers、Kelly、Fieldhouseという、それぞれに異なる時代的背景と研究的立場の異なる3者による著作を比較検討することから、イギリス成人教育史研究に特徴的な性質を浮き彫りにしようとしたものである。十分に綿密な分析、検討が至らなかった部分も多く、それらは今後の課題としたい。ここでは、3者の論点を簡潔に整理し、特に階級とジェンダーという視点から、現代のイギリス成人教育史研究についてえられる示唆を筆者なりにまとめることとする。

まず、Peersは、イギリスが産業国家・民主主義国家として発展していくプロセスをになう重要な要素として人々の市民性の育成を土台にすえ、成人教育を専門とする大学の研究者として、成人教育の体系化を進めた。Peersは、20世紀を現代的成人教育運動が確立した時期として位置づけ、その前段階として欠かすことのできない19世紀の労働者階級運動と大学を中心とした労働者階級への高等教育機会の提供をめぐる一連の動きを跡づけた。そして階級や性差などを越えた学習主体として「市民」という概念を用いることによって、イギリスにおける成人教育の意義を明確にしようとしたのである。

Kellyも、Peersと同じように成人教育の大学教授という立場にあった。しかし、Peersの大学成人教育史ともいえるような大学に比重を置くイギリス成人教育史ではなく、より広く成人

教育のあり方をみようとした。社会の様々な側面に成人の学習の場を見出し、それらが実際に「教室」よりも効果的に成人の学習を支えていることを明らかにした。中心的な学習主体として労働者階級に光をあてながら、成人教育の主な提供者であった中産階級の成人の学習に対する姿勢を批判的に論じた。女性についての言及は決して少なくなく、多様な学習機会を構成する重要な要素として女性をとらえていた。

Fieldhouseは、WEAのスタッフとしての経験をもった、成人教育を専門とする大学教授という立場にあった。現代イギリス成人教育史研究として、19世紀から1990年代までのイギリスの社会的・政治的・経済的文脈に成人教育の展開を結びつけた。そして、イギリス成人教育の特性として社会的目的性が強い点を肯定的にとらえる一方で、「成人教育は、社会に現存する文化的、イデオロギー的限界のなかでのみ機能しうる」⁷²⁾と結論づけた。

Fieldhouseのイギリス成人教育史研究において筆者が特に注目したいのは以下の二点である。それは、①イギリス成人教育史が現代に残した「遺産」として「非職業的でリベラルな成人教育と、職業的実用主義的な成人教育との区別を永続化させた」⁷³⁾と指摘している点、②現代の成人を対象とする学習機会が「特に高齢者や多くの女性を排除している」⁷⁴⁾と指摘している点である。

このようなFieldhouseの指摘から、筆者は、イギリス成人教育史研究がもってきた枠組みにある限界性が示唆されているのではないかと考える。労働者階級運動に強く影響を受けてきたイギリス成人教育史を対象にしたこれまでの研究は、労働者階級が拓いてきた知を積極的に跡づけることはできたが、それは男性の「知」の歴史だった。そして、労働者階級男性といっても、経済的・政治的潮流に後押しされて、イギリス社会において影響力をもつようになった上層部の男性であった。すなわち、イギリス成人教育史研究における学習主体、そして学習活動は限定的な枠組みでとらえられていたのである。したがって、このような歴史研究に依拠する現代のイギリス成人教育がもつ枠組みもまた、限界性をもっているといえるのではないだろうか。

このような問題意識において重要なのはジェンダーという視点であると考え。1960年の女性解放運動の影響を受けて、1970年代に女性学が誕生し、女性の視点から様々な領域において学問のあり方を問い直す動きがおこった。その後、J. W. Scott⁷⁵⁾に代表されるポスト構造主義の研究者からジェンダーという視点に立つことによって、様々な学問分野における従来の「知」のあり方を見直し、それを超えた新たな「知」の枠組みをつくっていかうとする研究の分析軸が提起された。筆者は、ジェンダー研究の理念と蓄積から、イギリス成人教育史研究の枠組みを批判的にとらえ、今後の研究につなげていくための示唆をえていきたい。

成人教育とは、それが生成される時空の文化的・社会的特性を反映し、その社会において独自に組織化された、成人を対象とした学習機会を提供し支援する一つの体系であるといえる。イギリス成人教育は、上流階級、中産階級が支配的に享受してきた高等教育機会を労働者階級が手にできるようにすることを追求した一連の動きを歴史的背景としてもつものである。すなわち、成人教育は、特定の時間と空間において付与されてきた組織的・体系的な価値であり、文化や社会の産物なのである。そして、その成人教育の発達経緯を跡づけるのが成人教育史で

あり、本稿でみたように異なる時間区分や分析軸を用いた研究の対象となってきた。

ジェンダーという視点は、ものごとの固定的なとらえ方、考え方を解きほぐし、それが文化的・社会的な仕組みのなかにどのように位置づいてきたのかを明らかにし、新しい「知」の構築⁷⁶⁾を目指そうとするものである。ジェンダーの視点に立つことによって、筆者は、イギリス成人教育が歴史的・社会的にどのようにして構築されてきたのかという問題に迫れるような研究が可能なのではないかと考える。すなわち、ジェンダーをイギリス成人教育史を対象とした研究の分析軸にするということは、イギリス成人教育における女性の存在だけでなく、イギリス成人教育史で描かれてきた「普遍的な人間」としての男性がいかに制約を受けた人間像であったかを指摘するということでもある。

成人教育の分野での経験もあるD. Thompsonは、チャーティスト運動⁷⁷⁾にいかに関わっていたかを明らかにし、それにもかかわらず従来の歴史研究では女性はアウトサイダーであったことを指摘した。Thompsonは、労働者運動が組織化・体系化していくにつれて、それまで運動に関わっていた女性の姿が消えていったとし、その原因は、労働者運動自体が近代化＝男性化した過程にあったことを指摘した⁷⁸⁾。Thompsonの研究から、ジェンダーという分析軸を用いた研究は、事象の全体の構造に迫ることのできる研究の可能性を提示していると考えられることができる。それは、従来の認識枠組みを根本から変えようとするものである。

筆者は、イギリス成人教育の現代における意義と可能性を探究するうえで、このような研究の分析軸は重要なのではないかと考える。今後、イギリス成人教育が依拠してきた歴史的・社会的に生成されてきた枠組みを、ジェンダーの視点に立って批判的に検討しながら、現代における成人の学習を力づけ、その支援に貢献できるような研究へとつなげていくことを目下の課題としたい。

- 1) 本稿では、イギリス成人教育をBritish Adult Educationの訳語として用いる。しかし、留意したいのは、イギリス成人教育史は実質的に、イングランドを中心とした歴史を意味するという点である。本稿で考察の対象とする著作においても、イングランド中心の歴史研究となっていることへの認識を示している（例えば、Kelly, T., *A History of Adult Education in Great Britain*, Liverpool University Press, 1962; 2nd edn., p.v）。イギリス成人教育史と地域性についての議論は、別稿にて改めて論じる必要があるだろう。
- 2) 19世紀中ごろまでの農業革命の結果、土地を独占する地主、その土地を借りて農業を経営する資本家、そして賃金で働く労働者が出現し、商工業が発展、人口が増加した。このようにして産業革命の「一つの基礎的条件となる『自由な労働者』が産業革命によって大規模に創出され」た。（大野真弓『イギリス史』山川出版社 1980年 p.197）この社会構造の変化は「多数のプロレタリアを創出し、資本家と労働者、富者と貧者の階級対立なる深刻な社会問題を惹起した…機械の発明と生産組織の変革は…賃金労働者の生活を悲惨なものにした」。（ibid., p.224）
- 3) イギリス成人教育の伝統とされるリベラリズムの本質を、責任団体制度とかかわらせて追求した矢口は、リベラリズムについて以下のように述べている。「イギリス成人教育におけるリベラリズムの伝統は、イギリスにおいて発展した『自由』に対する思想を源泉とし、19世紀における産業革命の進展とそれによってもたらされた新しい社会の矛盾に対峙した労働者階級の人々、知識階級の人々、そして宗教家のそれぞれの社会変革に対する意思によって形成されたものであった」。（矢口悦子『イギリス成人教育の思想と制度―背景としてのリベラリズムと責任団体制度』新曜社 1998年 p.351）

- 4) 矢口によれば、「リベラリズムの伝統とは、ボランティアな運動によって実現される思想であり、イギリス成人教育の基盤をなしてきた。(ibid., p.20)「宗教的な使命として、あるいは社会的な良心の声に従った慈善として、さらには社会の安定を維持するための手段として、どの一つをとってみても成人に対する教育はそれにかかわる人々のボランティアな行動によって支えられてきた」。(ibid., p.2)
- 5) 18世紀後期以降、日曜学校や成人学校などにおいて成人が識字を学ぶ機会が民間の力によって提供された。そのような歴史的背景から「イギリス人の国家の干渉への懐疑」が生まれ、後のイギリス成人教育の展開に影響を及ぼした。(M. D. スティーヴンス『イギリス成人教育の展開』渡邊洋子訳 明石書店 2000年 p.43)
- 6) 渡邊洋子「イギリス成人教育の方法論的成立に関する史的考察—初期テュートリアル・クラスの生成過程に注目して—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第52号 2006年 p.1
- 7) J. W. Hudson, *The History of Adult Education* (1851) The Woburn Press 1969
- 8) 例えば、M. D. Stephensは、『イギリス成人教育の展開』のなかでHudsonの詳細な調査結果によりながら職工学校(メカニクス・インスティテュート)について述べている。(『イギリス成人教育の展開』op. cit., p.44) また、Peersは特に、初期成人学校がどれほど当時のイギリス成人教育に影響力をもっていたかを述べるのにHudsonを引用している。(Peers, R., *Adult Education: A comparative study*, Routledge & Kegan Paul, 1959, pp.9-12)
- 9) *The 1919 Report: The final and interim reports of the Adult Education Committee of the Ministry of Reconstruction 1918-1919*, Department of Adult Education, University of Nottingham, 1980
- 10) 朝倉は、1918年、1919年の成人教育委員会報告書についての論稿をはじめるにあたって、「本稿においては、中間報告書『成人教育に関する産業的、社会的条件』及び『最終報告書』について論述するが、前者が成人教育をすすめるための基礎的条件の改善について、後者が現在の成人教育の原型となる勧告をしたことに於いて重要な意味を持っている」と同報告書について紹介し、「現在の成人教育の原型となる勧告をなしたことによって、さらに庶民教育的志向を強く持っていたのであった。なお、『最終報告書』に於ける1800年以降の成人教育史に関する記述は、最も優れたイングランドとウェールズの成人教育史であるとされ、その意味でも『最終報告書』は英国成人教育史研究にとって重要な意味を持つてくるのである」と指摘した。('英国の成人教育に於ける庶民教育への志向2—1918、9年の国家再建省成人教育委員会報告書を中心として—)『早稲田大学教育学部学術研究』教育・社会教育・教育心理・体育編 第26号 1977年 p.51, p.52) 1919レポートは、それ自体、イギリス成人教育における歴史的書物として丁寧に検討していく研究対象であると考えられるため、現段階で筆者が扱うことはできない。
- 11) Harrison, J. F. C., *Learning and Living 1790-1960: A study in the history of the English adult education movement*, Routledge and Kegan Paul, 1961
- 12) Simon, B., *Education and the Labour Movement, 1870-1920*, Lawrence & Wishart, 1965
- 13) B.Simon 成田克也訳『二つの国民と教育の構成 イギリス教育史1(1780年-1870年)』亜紀書房 1972年、成田克也訳『教育と労働運動 イギリス教育史2 (1870年-1920年)』同1980年、岩本俊郎訳『教育改革の政治学 イギリス教育史3 (1920年-1940年)』同1984年
- 14) 例えば、大学構外成人教育についての文献にはStephens, M. D. & Roderic, G. W., (ed.), *Extramural Empires: Service & Self Interest in English University Adult Education 1873-1983*, Department of Adult Education, University of Nottingham, 1984; WEA (労働者教育協会)の歴史を扱った文献には、Stocks, M., *The Workers' Educational Association: The first fifty years*, G. Allen, 1953がある。
- 15) 宮坂広作『英国成人教育史の研究Ⅱ』明石書店 1996年
- 16) 小堀勉編『欧米社会教育発達史』亜紀書房 1978年
- 17) 矢口悦子著『イギリス成人教育の思想と制度—背景としてのリベラリズムと責任団体制度』新曜社 1998年
- 18) 朝倉征夫は、イギリス政府によって発表された成人教育に関する報告書の分析から、イギリス成人教

育の歴史的考察を行った。「英国の成人教育に於ける庶民教育への志向」（『早稲田大学教育学部学術研究』 教育・社会教育・教育心理・体育編 第25-30号 1976年-1981年）は、1から6までのシリーズとなっており、主にイギリス政府復興省成人教育委員会による1918年、1919年報告書の分析を行っている。

加藤詔士は特に、MIの原義について綿密に調べ、検討し、多くの論文をまとめた。たとえば、「Mechanics' Institute原義考」『人文論集』 神戸商科大学学術研究会 第20巻第2号 1984年 pp.129-149など

香川正弘は、大学拡張に関する貴重な資料を翻訳し紹介するとともに、大学拡張案や講義について考察を行った。例えば「19世紀英国大学拡張運動の研究—拡張講義の構成要素を中心に—」『広島大学教育学部紀要第一部』 広島大学教育学部 第20号 1971年 pp.175-185など

- 19) Peers, R., *Adult Education: A comparative studies*, Routledge & Kegan Paul, 1958; 2nd edn., 1959; 3rd edn., 1972: 本稿では最新版の第三版ではなく、第二版(1959)を考察の対象として取り上げる。なぜなら、筆者は考察対象の著作者の研究の立場だけでなく、執筆された時代を重視したいからである。第一版と第二版はほとんど時代がかわらないことから、改訂された第二版を取り上げることとする。
- 20) Kelly, T., *A History of Adult Education in Great Britain*, Liverpool University Press, 1962; 2nd edn., 1970; 3rd edn., 1992: 本著作についてもPeersの著作と同様の理由から本稿においては第二版を考察対象とする。
- 21) Fieldhouse, R., et al, *A History of Modern British Adult Education*, NIACE, 1996
- 22) 例えば、Stephensは、Peersを「世界初の成人教育学の教授となった」と紹介し、成人教育の定義としてPeersの以下の言葉を引用している。「成人教育がおおむね取り扱わなければならないのは、我々の社会が基礎をおいている、そして我々の社会が生き残るのに不可欠な、教養主義的諸原理である…人を人間として、そして、国家や世界というよりは大きな社会の、自由で責任ある成員として見なすことにこそ、教養主義的諸原理の中核的要素が存するのである」。(『イギリス成人教育の展開』op. cit., p.37)
また、Kellyに関しては小堀が、「その後現在に至るまで、いくつかの成人教育史にかんする著作が出版され、ことに1950年代以降、すぐれた研究があらわれ始めたが、それらは地方史研究であったり、特定の運動についての研究であって、通史とよばれるべきもの」がKellyの著作であるとしている。(『欧米社会教育発達史』op. cit., p.85)
- 23) 日本の文献でも小堀、宮坂、渡邊などがイギリス成人教育全般をあつかった歴史研究書としてPeersの本著作をあげている。渡邊によれば「ピアーズは同大学(ノッティンガム大学…引用者)を拠点として数々の理論的・実践的研究を行い、イギリスの成人教育研究の素地をつくったともいうべき人物であり、以後、同大学では成人教育担当教授に「ロバート・ピアーズ・プロフェッサー」という称号を与えるようになった」という。(渡邊洋子『生涯学習時代の成人教育学』op. cit., p.85)
- 24) 宮坂『英国成人教育史の研究Ⅱ』op. cit., p.53: WEAとは、1903年にA. Mansbridgeによって設立されたWorking-class Educational Association(労働者教育協会)という名称の組織である。WEAは、その初期において大学と連携して、労働者階級に教育提供をすることを目的とした労働者階級組織である。
- 25) Peersの業績や他の著作については、Jarvis, P., *Twentieth century thinkers in adult & continuing education*, 2nd ed., Kogan Paul, 2001, pp.115-126に詳しい。
- 26) 本著作は以下のような構成になっている。第一部「イングランド成人教育English Adult Educationの背景」第二部「今日のイギリスにおける成人教育の組織と性質」第三部「成人学習者と成人学習の可能性」第四部「教師と方法」第五部「他国における成人教育」
- 27) Peersは本著作の「はじめに」において「私は成人教育史を二世紀の間に起こった変化する社会的背景と関連させようとした。そして第一部での歴史的概観は現代の流れを理解するうえで必要なのである」と述べた。(Peers, *Adult Education: A comparative study*, 2nd edition, op. cit., 2nd edn., p.vi)
- 28) *ibid.*, pp.3-13参照
- 29) 現代イギリス成人教育運動の背景となったものとして、Peersは、以下のような政治的・経済的要素を挙げている。それは、経済的繁栄と参政権の拡大、全国規模での労働者階級運動の発展、労働者階級

の社会への期待と展望、1870年教育法以降の普通初等教育の確立である。(ibid., p.48) 19世紀後半のイギリス成人教育の展開として、Peersが取り上げているのは、後期成人学校運動の隆盛、そしてキリスト教社会主義の影響をうけて設立された人民カレッジやロンドン労働者カレッジなどによる、労働者階級を対象にした学習機会の提供である。(ibid., pp.30-46参照)

30) ibid., p.75

31) 20世紀初頭における大学テュートリアル・クラスは課題を抱えてはいたものの、Peersはその成果を高く評価する。到達点としてPeersは①普通の労働者の人々が知的能力をもっていることを示すことが出来た点、②大学教員が労働者階級の男性、女性と交流することが出来るようになった点、③クラスでの学習者はその後の新しい民主主義的なリーダーシップの中核を築いた点を挙げた。そして、限界性として①都市部の活動となり、農村部まで波及しえなかった点、②熟練労働者を対象にしてアピールがされていた点、③学習された科目が社会学系に偏っていた点、④大学テュートリアル・クラスの取り組みは、大学内部において周縁的でしかなかった点を挙げた。(ibid., pp.80-83参照)

32) ibid., pp.85-86

33) Peersは、イギリス成人教育の主要な担い手として大学を位置づけた。大学が政治、国家内における権力関係から自由であるとする、大学のみが、「信条や解釈といった成人教育の領域になる事柄について客観的に扱うのに不可欠な、自由な議論のオープンな場になるだろう。イギリスの大学システムはこの点において、世界のモデルとなるのである」として、成人教育の実践の場としての大学の貢献を強調した。(ibid., p.350)

34) ibid., p.342

35) ibid., p.344

36) ibid., p.3

37) ibid., p.vi

38) Peersは、二つの世界大戦はコミュニティにおける女性の地位と権力に影響を及ぼし、女性がますます成人教育へ参加する背景になったとした。(ibid., p.173)

39) ibid.

40) テュートリアル・クラスにおける女性学習者の割合については、1919レポートとテュートリアル・クラス合同諮問中央委員会の年間報告書のデータを引用して、1912-13年には16.5%であったのが、1945-55年には55.0%まで女性の割合は増加したことを示した。(ibid., p.173)

41) 例えば、George Birkbeck: *Pioneer of adult education*, Liverpool University Press, Liverpool, 1957; *Early Public Libraries: A history of public libraries in Great Britain before 1850*, Library Association, London, 1966など

42) Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain*, 2nd edn., op. cit., p.v参照

43) ibid., p.v

44) PeersについてKellyは、初めての成人教育学部教授としての功績をたたえた。ノッティンガム大学成人教育学部は、特にイングランドの中東部全体での包括的な成人教育事業の提供者となったとした。(ibid., p.271)

45) ibid., p.81

46) ibid., p.112

47) ibid., p.v: このように述べた上でKellyは本書の目的について「したがって、私は無謀ではあるが、青写真を描こうとしたのだ。多様性をもつすべてのフォーマルな成人教育の展開を描き、同時にそのほかのよりフォーマルでない指導の在り方の影響がどのようなものだったのかを目的にして。実際、題名はごちないものでなかったら、私は『成人教育史 (A History of Adult Education)』ではなくて、『成人の教育史 (A History of Education of Adults)』にしたかった」とした。

48) ibid., p.181

49) 例えば、本や図書館については中世から20世紀にかけての各時代における様相を記している。図書館については特に、1850年公共図書館法を境にしてどのような展開をみせたのか、また20世紀に入ってから

柴原：イギリス成人教育史研究における労働者階級と女性の位置

らは戦後とその前の違いがわかるように叙述されている。加えて、アートギャラリーや博物館、コンサートや音楽活動についても、17世紀以降、20世紀にわたるまで変遷の様子が描かれており、Kellyが成人教育の具体的な場やきっかけとしてこれらを重視していたことがわかる。

50) *ibid.*, p.181

51) Kellyは、成人教育に参加した女性の職業や、学習した科目についても詳細に述べている。例えば、1864年に設立された「労働者女性カレッジ (Working Women's College)」から分離した「労働女性のためのカレッジ (College for Working Women)」には、販売員、家事使用人、婦人帽製造・販売者、看護師、教師などが学生となり、カリキュラムには裁縫、料理、衛生といった家庭領域にかかわる科目がアカデミックな科目と並んで含まれていたとした。(ibid., p.187)

52) *ibid.*, p.227

53) 20世紀前半には、女性の政治的・社会的開放を求める動きを反映して、女性の成人教育は組織化が進み、学習が市民性と結びつくような学習機会もあったとする。例えば、1910年代、20年代にイングランドとウェールズの農村部に設立された女性インスティテュートの活動内容にKellyは言及した。そこで、女性たちは月一回のミーティングに集まり、家事や衛生、育児などに家庭領域に関することについて、また村の自治や自治体の機能について学んだという。「そこで彼女たちは人々のまえでどう話すのか、決議はどのようにつくっていくのか、おそらくどのようにして議長をつとめるのかさえ学んだのである。多くの人が特別のトレーニング・コースに参加し、ボランティアな地域のオーガナイザーになった。これはすべて究極的には市民教育であり、もっとも実践的である」と述べた。(ibid., p.302)

54) M.D.スティーヴンス著『イギリス成人教育の展開』の訳者である渡邊は、イギリスの読者を対象とした本書を日本の読者が理解しやすくするために、本文に入る前に「用語解説」を行った。そこでは、*continuing education*は次のように定義されている。「広義には、従来の非職業的な成人教育を包括する幅広い概念として、また（両者を同時に扱うにしても、従来軽視されていた職業教育の方にもどうしても重点が置かれがちだという背景もあって）狭義には主に職業教育を意味する概念として」用いられている。(渡邊洋子訳 M.D.スティーヴンス著『イギリス成人教育の展開』*op. cit.*, p.8)

55) Fieldhouse, *A History of Modern British Adult Education*, *op. cit.*, p.438参照：執筆者紹介によると、Fieldhouseは北ヨークシャーのWEAで1964年にチューター・オーガナイザーとなり、6年後リーズ大学の構外教育学部のスタッフとなった。ヨークシャー史研究ののちに、成人教育史に関心を向けるようになった。1984年に取得した博士号の提出論文は「イングランド成人教育責任団体のイデオロギー 1925-1950年」。

56) Fieldhouseのほかの著作には、*The WEA: Aims and achievements 1903-1977*, University of Syracuse, New York, 1977; *Adult Education and the Cold War*, University of Leeds, 1985; *Anti-Apartheid: A history of the movement in Britain, 1959-1994*, Marlin Press, 2005などがある。

57) Fieldhouse, *A History of Modern British Adult Education*, *op. cit.*, p.vii：この本でFieldhouseは、代表編集者をつとめ、自身は第一章「歴史的・政治的文脈」第二章「19世紀」第三章「20世紀」第四章「LEAと成人教育」第七章「WEA」第八章「大学成人教育」最終章「イギリス成人教育：過去、現在、未来」を執筆した。他の章は現代のイギリス成人教育に実践と研究の両面に関わってきた人々が担当している。

58) *ibid.* p.208：ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジは1919レポートの勧告に従って、最初に成人教育の大学機関を設置した。Peersは1920-1年セッションを開始するにあたって長として任命された。その後5-8年でスタッフの数、クラス数、学生数ともに急速に増加した。ノッティンガムではWEAが先駆的な成人教育の取り組みを構外教育学部設立前からすでに行われていたことから、他の地域よりも成人教育の発展の条件が整っていたという。

59) *ibid.*, p.44：Fieldhouseは、Peersのイギリス成人教育史研究が、「19世紀が20世紀という到達点を美化するものへと必然的につながる」ものであるとして、「私たちはむしろそれほど楽観的ではなく現在の進行状況についてより皮肉的であるかもしれない」と述べた。

60) *ibid.*, p.vii

- 61) *ibid.*, p.358: この点は第十三章の「放送と成人教育」(執筆担当はB. Groombridge)の中で述べられている。「啓発的、補助的もしくはそれ自体完結しているもの—これらのもつ明確な機能に対する政策や実践についての示唆を見出すこと」が歴史家の仕事であると述べられ、このような観点からKellyの研究が評価されている。
- 62) *ibid.*, pp. 44-45
- 63) *ibid.*, p.41
- 64) *ibid.*, p.45
- 65) *ibid.*, p.392
- 66) *ibid.*, p.393: ここでの「より幅広いリベラルなアプローチ」とは「リクリエーション・コースや余暇のコース、個人的発達や、いくつかの地方当局が行う成人教育の社会的・政治的側面」を含むものである。
- 67) *ibid.*: Fieldhouseは特にLEA(地方教育当局、Local Educational Authority)の動向に関連してこの問題を提起している。LEAは地域課題と密接に関わりながら、成人教育提供機関としてイギリス成人教育の展開では主要な役割を果たしてきた。Fieldhouseによれば、1970年代、80年代とLEAは社会的不利益層に対する学習機会提供に取り組んできたが、財政問題の影響を受け、本来の目的を果たしえなくなってきた。特に1992年の継続教育・高等教育法はLEAの重要性を低めたとする。(ibid., pp.392-393)
- 68) 執筆者はFieldhouseではなくR. Bennであるが、Bennは、Fieldhouseの問題意識を共有し政治的・経済的な歴史と女性をめぐる状況の変化とを結びつけて現代に至るまでのイギリス成人教育における女性の存在を論じている。(ibid., pp.376-390: Chapter 5 'Women and Adult Education') Bennは、特にイギリス政府が発表した成人教育に関する報告書について注目し、そのなかでの女性の扱われ方を論じている。1919レポートやラッセルレポートなどイギリス成人教育の展開において重要な報告書について考察していることは注目されるべきである。
- 69) *ibid.*, p.399
- 70) *ibid.*, p.391
- 71) *ibid.*, p.401
- 72) *ibid.*, p.399
- 73) *ibid.*, p.41
- 74) *ibid.*, p.393
- 75) J.W. スコット『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳 平凡社 2000年: スコットは「ジェンダーとは、肉体的差異に意味を付与する知」と定義している。
- 76) 長野によれば、ジェンダー研究の理念とは、「主体も対象も目的も、男性という性を普遍=人間とみなし、女性を他者として排除することで構築された近代市民社会の「知」を脱構築し、ジェンダー・バイアスのない新たな『知』の創造をめざしていた」である。(長野ひろ子『ジェンダー史を学ぶ』吉川弘文館 2006年 p.21)
- 77) チャーティスト運動についてThompsonは以下のように説明している。「チャーティズムは1838年から1858年に至る時期のイギリスの労働者層のかなりの部分を動員した運動であった」。(D. トンプソン『階級・ジェンダー・ネイション—チャーティズムとアウトサイダー—』古賀秀男 小関隆訳 ミネルヴァ書房 2001年 p.27)「チャーティズムは成人男子へ普遍的に公民権を賦与する要求を取り込んだ、最初の大規模な国民運動であり、近現代の労働運動が直面した複雑な問題の多くに早い段階で取り組んだ運動として、特別な関心をもたれることになった」。(ibid., pp.28-29)
- 78) *ibid.*, pp.117-157: 本著作においてThompsonは、労働者運動における女性だけではなく、地域性、国家性も歴史研究の分析軸として採用している。